

を用いて ^{201}Tl ウィンドウに対する $^{99\text{m}}\text{Tc}$ の crosstalk 率を $^{99\text{m}}\text{Tc}$ の濃度を変えて測定し、TEW による補正を行った。次に、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ と ^{201}Tl の activity が 1:1, 1:1.5, 1:2 の混合液を 3 種類作成し、TEW による補正を行った。 ^{201}Tl ウィンドウに対する $^{99\text{m}}\text{Tc}$ の crosstalk 率は各濃度ともほぼ 10% で、TEW 法による補正で crosstalk 率は 3~7% に減少が認められた。TEW により、混合液の ^{201}Tl ウィンドウでのカウント数は ^{201}Tl 単体のカウント数のほぼ 60% で一定であった。甲状腺ファントムを用いた基礎的検討において、TEW 法は crosstalk の補正に有用であった。

5. 分化型甲状腺癌におけるヨード内用療法の臨床的検討

磯部 優子	山本 由佳	中野 覚
高橋 一枝	西山 佳宏	高島 均
田邊 正忠		(香川医大・放)
川崎 幸子		(麻田総合病院・放)

過去 13 年間当科にて ^{131}I 内用療法を施行した分化型甲状腺癌における ^{131}I の集積、生存率について検討した。対象は 1984 年 11 月から 1996 年 12 月までに ^{131}I 内用療法を施行し、転移を有する甲状腺癌 64 例 (11~84 歳, 平均 53.1 歳, 男性:女性=16:48)。組織型は乳頭癌 51 例, 濾胞癌 13 例, 転移部位はリンパ節転移 15 例, 肺転移 38 例 (リンパ節転移併発例も含む), 骨転移 11 例 (リンパ節, 肺転移併発例も含む)。 ^{131}I の集積を認めるものは 40 歳以下の若年者, 濾胞癌, 骨転移, リンパ節転移で多かった。生存率については, ^{131}I 集積例で高く, 年齢別では高齢者よりも若年者で高かったが, 組織型では差はなかった。また, 骨転移では集積するにもかかわらず, 生存率は低かった。

6. 肝切除安全域推定における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチグラフィの有用性

河野 良寛	新谷 直道	向井 敬
中川 富夫		(国立福山病院・放)
高倉 範尚		(同・外)
鈴木 康徳		(中国中央病院・放)
平木 祥夫		(岡山大・放)

術前 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチグラフィ (GSA シンチ) が施行された 26 例を対象とした。GSA シンチの指標の一つの LU15 を求め、術後残肝容積 % を LU15 に乗じて RLU15 を算出した。術後高ビリルビン血症 (高ビ血症) をきたした群の RLU15 はきたさなかった群の RLU15 より有意に低値であった。高ビ血症をきたす RLU15 の閾値は 17.5 であり, RLU15 が 15 以下では 40% に高ビ血症をきたした。RLU15 は肝切除安全域推定に有用と思われた。

7. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチグラフィによる肝機能評価——多変量解析による核医学指標群と血液生化学指標群との対比——

鈴木 康徳	水田 昭文	(中国中央病院・放)
新谷 直道	向井 敬	中川 富夫
河野 良寛		(国立福山病院・放)
平木 祥夫		(岡山大・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチによる肝機能指標群と血液生化学検査群との相関につき正準相関分析を用い検討を行った。対象は TAE を施行された肝細胞癌 48 例で, LHL15, HH15, LU15 を核医学指標群とした。また血液生化学検査群として T, Bil, Alb, Ch-E, ICGR₁₅, KICG を用いた。解析には Stat View および HALBAU を用いた。両群の正準相関分析では正準相関係数が 0.7105 と有意な相関を示した。血液生化学検査群の中では Ch-E, ICGR₁₅, KICG が核医学指標と強い関連を持つことが示された。これまで 2 変量で論じられてきたことが多変量解析でもほぼ同様の知見を得ることができた。